

RETAILER ACADEMY NEWS

Aug 2018 | Bentley Motors Japan

CENTENARY 100周年シリーズ [第1回]

創業者 W.O. ベントレー

ベントレー モーターズは2019年7月10日に100周年を迎えます。リテラー アカデミー ニュースでも、100周年に向けた企画として、ベントレーの100年の歩みを振り返ります。第1回は、創業者 W.O. ベントレーについてです。モータリングの概念を変え、比類のないパフォーマンスと至高のクラフトマンシップを生み出し、今や世界中に知られるラグジュアリーカーブランドを作った W.O. の人物像に迫ります。



1 機関車にあこがれた幼少期 ～その後興味は道路へ



1888年に9人兄弟の末っ子として生まれたウォルター・オーウェン・ベントレーは、W.O.と呼ばれることを好んでいました。そのW.O.は9歳のとき、買い取った自転車を解体して動きの構造を正確に把握したと伝えられています。その後、W.O.の情熱は蒸気機関車へと移っていました。16歳の時に学校を去るとグレートノーザン鉄道で見習いとして働き始めました。石炭を釜にくべる仕事などをし、子供の頃からの夢を叶えました。しかし、5年間の見習い期間が終わる頃には、W.O.が興味関心を抱く世界は、鉄道から道路へと変わっていたのです。

まだ鉄道で働いている頃、W.O.はバイクを購入し、2人の兄弟とともにレースに熱心に打ち込むようになりました。1907年に参加したロンドン-エジンバラ間のレースでは、故障を乗り越えながら見事金メダルを獲得。1908年にも2つのレースに出場し、いずれも優勝という成績を収めました。レースに打ち込むことで、エンジンパフォーマンスを向上させるW.O.の技術はさらに向上しました。

2 W.O.の運命を変えたペーパーウェイト



W.O.の技術は、1912年にフランスのDFPの自動車の輸入・販売を始めたときに、さらなる進化を遂げます。1913年にDFPのオフィスを訪れたとき、W.O.はアルミ製のペーパーウェイトを見つけると、この軽量素材を鋼鉄や鋳鉄の代わりにピストンに使えないかと考えました。強度を加え、高温で溶けるのを防ぐため、鋳物工場で新しい合金の開発に着手。最終的にアルミニウム88%、銅12%という配

合にたどり着きました。この新素材のピストンをDFP車に取り付けたところ、W.O.はブルックランズでのレースで勝利し、時速89.7マイル(約143.5km/h)を記録したのです。

3 ベントレーのルーツは航空機のエンジン



第一次世界大戦が勃発した頃、W.O.は自動車会社を設立するという野望を抱いていましたが、その代わりに彼の優位性を利用して国のために働きました。英国海軍航空隊のキャプテンとして、過去のエンジンよりもはるかに強力で信頼性の高い戦闘機用エンジンを作るため、W.O.はアルミ製ピストンを使用したのです。初のベントレー ローターエンジン「BR. 1」を搭載したソップース キャメル戦闘機は、この大戦で最も成功した戦闘機と言われるようになりました。

4 ベントレー モーターズの誕生



第一次世界大戦における国への貢献が認められ、W.O.は1919年の新年の荣誉リストに名を連ね、MBE(大英帝国勲章)を受賞しました。同時に優れた発明家であることも認められ、8000ポンドを授与されました。W.O.はこの資金を元手に自動車会社を設立。1919年7月10日にベントレー モーターズが誕生した瞬間でした。この時にW.O.は「ポリシーはシンプルだ。速いクルマ、良いクルマ、クラスで最高のクルマを作る」と語り、それがベントレー モーターズのクルマづくりの哲学として、現代まで受け継がれてきたのです。

5 ロードやサーキットで抜群の存在感



W.O.が最初のベントレーを開発している間、Autocar誌はその様子を「ツーリングアクセサリーを搭載した真のレーシングカーを求める熱心なモータリストにアピールするつもりようだ」と伝えています。これは今日でもベントレーのDNAとして受け継がれているもの。3リッターの成功の後、6気筒の6リッターのエンジンは、ビッグ6として、そしてスピード6として2年後の1926年に発売されました。1928年には4 1/2リッターを、1930年には8リッターを製造。こちらはロードカーでしたが、激しい競争で結果を出せるだけのパワーと耐久性がありました。ベントレーがル・マンで5回の優勝を飾ったのも、この期間です。

6 W.O.の手による最後のモデル



8リッターはW.O.が手がけた最後のモデルであり、W.O.の傑作と広く考えられています。これは直列6気筒エンジンのパワーとトルクで、時速100マイル以上の能力があると宣言されていたからです。W.O.は「私はいつも静粛性を極めた時速100マイルが出るクルマ(Dead Silent 100 mph car)を作りたいと考えてきて、今それを実現できた」と語ったといいます。8リッターのレビューを掲載したザ・タトラ誌は、「このような驚異的なパフォーマンスを発揮するクルマが、これほどまでに滑らかさや静粛さと両立するものであることを知らなかった」と評しています。

21年ぶりに刷新された ショーファーカーの最高峰 トヨタ センチュリー



トヨタ センチュリーは、トヨタグループの創始者、豊田佐吉の生誕100年を記念して1967年に発売された、日本を代表するショーファーカーです。今年6月22日に発売された新型センチュリーは3代目にあたり、1997年に登場した2代目モデルから実に21年ぶりにフルモデルチェンジされました。

新型センチュリーの開発テーマは「継承と進化」。歴代のセンチュリーが受け継いできた高品質なモノづくりの伝統を継承しながら、ハイブリッド化による環境性能の大幅な改善と、乗り心地をはじめとする快適性の向上を実現しています。

和の美しさを体現したエクステリア

日本独自の美意識を表現したエクステリアは、伝統的な水平基調のデザインはそのままに、傾斜を立てた太いウォータービラーにより後席の存在感を強調し、ショーファーカーにふさわしいフォルムへと進化しました。ボディサイズは、全長5,335mm、全幅1,930mm、全高1,505mmで、従来型に比べて全長で65mm、全幅で40mm、全高で30mm拡大。ホイールベースも65mm延長されています。ディメンションはフライングスパーとほぼ同等で、世界のラグジュアリーセダンに匹敵する堂々としたサイズであることが分かります。



後席の乗員をもてなす工夫の数々

ボディサイズの拡大に伴い、後席の居住性は全体的に向上しています。また、スカッフプレートとフロアの段差を縮小し、併せて後席のヒップポイントを上げることで乗降時の負担を軽減。和服での足さばきや帽子を着用した女性の動きなどを考慮して設計されています。



シート表皮は最高級素材を使用したファブリックが標準で、本革は有償オプション。ウッドパネルはブラウンのタモ杣が標準となり、本革シート仕様ではシルバーのアッシュ杣も選択可能。センターコンソールには、従来のスイッチに代えてタッチ式液晶操作パネルを採用し、直感的な操作を可能にしている



VIP席となる左側後席には、電動オットマンとリフレッシュ機能を備えた電動リクライニングシートを標準装備。センチュリーならではの寛ぎの空間を形成している

細部に宿る匠の技

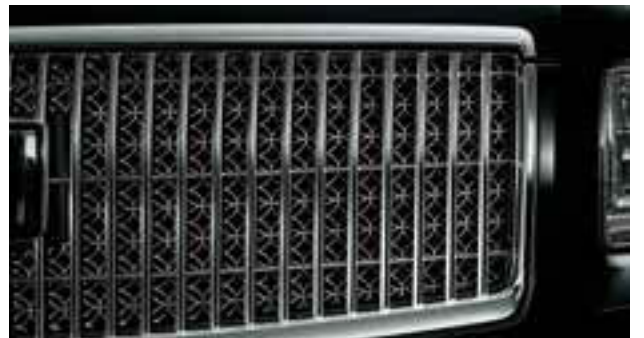
日本専用車であるセンチュリーの各部には、工芸品を思わせるづくりが随所に見られます。欧米のラグジュアリーセダンと競合するレクサス LSがグローバルな視点で設計されているのとは対照的に、日本独自の様式美やモノづくりへのこだわりが前面に打ち出されています。



【エンブレム】
フロントグリルの中央に輝く鳳凰のエンブレムは、江戸彫金の流れを汲む工匠が金型を約1カ月半かけて丁寧に手で彫り込んだもの。繊細かつ鮮やかな表情は、最新鋭の工作機器でも真似できない領域に達している



【キャラクターライン】
ショルダークラックのキャラクターラインには「几帳面」と呼ばれる、平安時代の柱の角などにあしらわれた断面処理の技法を採用している。しかし、「几帳面」は最新のプレス機においても仕上がりにわずかなヨレが生じるため、熟練の匠がサイドに走る2本のラインを角として研ぎ出すことで格調の高いラインを形成。精緻な仕上がりを実現している



【フロントグリル】
縦格子のフロントグリル奥には、縁起の良い文様とされる「七宝（しっぽう）文様」を配置。七宝文様はライトや時計の文字盤、レースカーテンなどにも施され、和の意匠を積極的に取り入れている



【折り上げ天井】
後席部分には、居室の天井の中央部を上方へ一段高く凹ませる建築様式の「折り上げ天井」を採用。さらに天井部分に凹を組み合わせた「紗綾（さや）形崩し柄」の織物を採用することで、格式高い空間を演出



【鏡面仕上げの塗装】
塗装工程では、2人が手作業で約90分かけて行う「水研ぎ」を3回実施。これにより塗装面が平滑になり、ボディカラーの奥深い艶と輝きを実現している。特にイメージカラーのエターナルブラック「神威（かむい）」では、新たに黒染料入りのカラークリアを採用。塗装も従来の5層から7層として、漆黒感を追求。そして仕上げには、高級漆器「輪島塗」を手本にした磨き上げを行い、徹底した鏡面仕上げを施している

ハイブリッド化で燃費も向上

パワーユニットは、従来の5.0リッター V12エンジンから、5.0リッター V8ハイブリッドに変更。これによりJC08モード燃費は7.6km/lから13.6km/lに向上しています。日本車唯一のV12エンジンは姿を消すことになりましたが、最高出力は従来比101psアップとなる381ps、最大トルクは50Nmアップの510Nmへと強化され、環境性能との両立が図られました。

価格は従来から約700万円アップとなる19,600,000円。価格においても世界を代表するラグジュアリーセダンに肩を並べる存在となりました。この価格アップが公用車市場などでどのように影響するのか、非常に興味深いものがあります。

COMPETITORS INFORMATION



ニューモデル レンジローバー /レンジローバー・スポーツ PHEV

発表・発売日	2018年6月27日 予約受注開始		
概要	・ 2.0リッター直4ターボエンジンに電気モーターを組み合わせたパ ラレル・ハイブリッド ・ システム合計で最高出力404ps、最大トルク640Nmを発揮 ・ EVモードでの最大航続距離は51km		
車両価格 (税込)	主なラインアップ RANGE ROVER VOGUE (PHEV): 15,080,000円 RANGE ROVER SVAutobiography (PHEV): 28,660,000円 RANGE ROVER SPORT HSE (PHEV): 11,850,000円 RANGE ROVER SPORT AUTOBIOGRAPHY DYNAMIC (PHEV): 13,150,000円		
デリバリー 開始時期	—		



マイナーチェンジ メルセデス・ベンツ Sクラス クーペ/カブリオレ

発表・発売日	2018年6月20日 発売		
概要	・ Sクラス・セダンと同じ最新の安全運転支援システムとテレマティク ス・サービスを採用 ・ 新意匠のフロント・バンパーや有機ELリア・コンビネーションラン プを採用 ・ パワートレーンを刷新		
車両価格 (税込)	主なラインアップ S 450 4MATIC クーペ: 15,080,000円 メルセデスAMG S 63 4MATIC+ クーペ: 25,330,000円 S 560 カブリオレ: 21,750,000円 メルセデスAMG S 65 カブリオレ: 34,700,000円		
デリバリー 開始時期	—		



ニューモデル マクラーレン 600LT

発表・発売日	2018年7月30日 発表		
概要	・ 伝統のモデル名、LT (ロングテール) の名を冠した4番目のモデル ・ 3.8リッター V8ツインターボエンジンは最高出力600ps、最大ト ルク620Nmを発揮 ・ 570S クーペに比べ96kgの軽量化を実現。0-100km/h加速は2.9 秒		
車両価格 (税込)	マクラーレン 600LT: 29,999,000円		
デリバリー 開始時期	—		



ニューモデル メルセデス・ベンツ CLS

発表・発売日	2018年6月25日 発売		
概要	・ 新世代のメルセデス・デザインを採用した4ドア・クーペ ・ Eクラスなどと同様に最新の安全運転支援システムを採用 ・ 2.0リッター直4ディーゼルエンジンと、ISG搭載3.0リッター直6エン ジン搭載車の2本立て		
車両価格 (税込)	CLS 220 d スポーツ: 7,990,000円 CLS 450 4MATIC スポーツ: 10,380,000円		
デリバリー 開始時期	—		



ニューモデル アストンマーティン DBS スーパーレジャエーラ

発表・発売日	2018年6月27日 発表		
概要	・ ヴァンキッシュ Sの後継となる、同社量産車シリーズの頂点に立つ 高性能モデル ・ 5.2L V12ツインターボエンジンは最高出力725ps、最大トルク 900Nmを発揮 ・ 0-100km/h加速3.4秒、最高速度340km/hを実現		
車両価格 (税込)	DBS スーパーレジャエーラ: 本国価格 225,000ポンド (約32,000,000円)		
デリバリー 開始時期	—		



一部改良 ジャガー Fタイプ 2019年モデル

発表・発売日	2018年6月4日 受注開始		
概要	・ スマートフォンと連動するコネクティビティ機能を標準装備 ・ 最新世代のインフォテインメント・システムを装備 ・ エンジン、ボディタイプ、トランスミッション、駆動方式の組み合わせ により、全24モデルを展開		
車両価格 (税込)	主なラインアップ F-TYPE COUPE 2.0L P300: 8,060,000円 F-TYPE COUPE R-DYNAMIC 3.0L P380 (6速MT): 11,320,000円 F-TYPE CONVERTIBLE R 5.0L P550: 16,800,000円 F-TYPE CONVERTIBLE SVR 5.0L P575: 19,990,000円		
デリバリー 開始時期	—		

MULLINER



マリナーの新作が続々と登場

ベントレーのビスポーク部門を担うマリナーから、新作が続々と発表されています。
今回は、新しいウッドパネルとミュルザンヌのビスポーク例の提案についてご紹介します。

木の手触りを感じられる新たなウッドパネル

ビスポークのウッドパネルとしてマリナーがこのほど開発したのが、「Open-Pore Walnut」です。このウッドパネルの最大の特徴は、0.1mmという極限まで薄くしたラッカーのコーティング。通常のウッドパネルに施されるコーティングの厚さは0.5mmで、これが美しい



光沢の元となっています。しかし、今回開発した新技術では、まるでワックスをかけたような艶を出すことに成功。コーティングの薄さにより、触ると木目を感じることもできます。対応車種は、ミュルザンヌ、ペンティガ、フライングスパーです。高級感の中に温かみを感じられる内装を実現する手法として、お客様にもぜひお勧めください。

現代的な特徴に伝統を融合させた ミュルザンヌのビスポーク

マリナーのデザイナーは、現代的な特徴と伝統的な高級感を融合させたミュルザンヌを作りました。

エクステリアは、ボディカラーにSilver Stormを採用。これは明るく温かみのあるシルバーです。スプリットリムの21インチアロイホイール

は、Belugaカラーをグロスブラックで仕上げました。ホイール周囲にはクロームのリベットを付け、現代風でありながら草創期のベントレーにも通じるテイストとしています。

インテリアでも伝統的なラグジュアリーさを演出しています。ウッドパネルはOlive Ashで、ソフトラムウールのラグとともに4人の乗員がミュルザンヌに期待する洗練された雰囲気を作り出しています。レザーはPortlandを選択。Olive Ashのウッドパネルとの相乗効果により、明るく軽快なキャビン印象づけています。

写真は日本未導入のミュルザンヌEWBですが、このビスポークは通常ホイールベースのミュルザンヌにも対応しています。マリナーのビスポークの例として、リテーラーの皆様にはショールームでの展示用にご注文いただくことも可能です。





CONFIGURATION

理想のベンティガ V8 をご提案するために W12 との価格差を埋められるオプション

ベンティガシリーズに新たに加わったベンティガ V8。車両本体価格を比べるとW12とはおよそ7,900,000円の開きがあります。ベンティガ V8からはレッドバッジが廃止されるなど、W12との外観上の違いは小さくなっています。W12がご予算に合わず諦めてしまったお客様に、再度予算内で理想のベンティガを実現するご提案も可能です。

Bentayga V8



Bentayga W12



ボディカラーにはBentayga Bronzeを、ホイールには22インチディレクショナルアロイホイールを選択しました。内装のカラーズプリットは「E」、メインのレザーカラーにはLinenを、セカンダリーレザーにはPorpoiseをそれぞれ選択しました。同内容のW12と比較すると、外観上の違いはテールパイプの形状のみ。内装もシートやドアトリムのキルティング以外はほぼ同じです。下の表のオプションを付けても、合計額はW12の車両本体価格を下回ります。V8でも遜色ない理想の1台に仕上げられる点を、ぜひお客様にご提案ください。

	ベンティガ V8
車両本体価格（諸費税8%込）	¥19,946,000
Mullinerドライビングスペック	¥1,286,300
シティスペック	¥441,300
ツーリングスペック	¥1,109,400
標準ブレーキ&レッドキャリパー	¥219,000
Bentley ダイナミックライド	¥695,700
リアプライバシーガラス	¥278,300
ブライトクロームロワーバンパー&マトリックスグリル	¥338,400
カーボンファイバーパネル	¥528,400
カーボンファイバーセンターフェイスパネル	¥90,300
3本スポークデュオトーンステアリング	¥63,900
ドリルドアロイススポーツフットペダル	¥124,100
4シーターコンフォートスペック	¥1,553,100
コントラストステッチ	¥279,200
ステアリングホイールのコントラストステッチ	¥29,100
エンブレム刺繍	¥94,000
後席のコンフォートヘッドレスト	¥88,400
ディーパイルオーバーマット	¥69,600
TVチューナー	¥173,000
合計額	¥27,407,500

『007』シリーズ作者の R-Type コンチネンタル



100周年に向けて制作されたムービー「Together we are Extraordinary: The Story of Bentley Motors」には、R-Type コンチネンタルが登場します。このクルマに取り付けられているナンバープレートをよく見ると「BLT 934」の文字が見えます。このR-Type コンチネンタルこそが、映画『007』シリーズの作者であるイアン・フレミングが所有していた1953年製のクルマなのです。

ジェームズ・ボンドを生み出した作者のクルマは、英国のエージェントに小説「サンダーボール」のようなモデルを与えるきっかけになったと考えられています。また、ジェームズ・ボンドが人生で出会った女性たちよりも愛したクルマは、ベントレーを象徴するモデルであり、新型コンチネンタルGTのデザインにも大きな影響をもたらしました。

ちなみにムービーに登場するクルマは実車ではなくCGによるもの。しかし、100年に迫るベントレーの歴史の中で、このクルマを無視することはできません。

ムービー「Together we are Extraordinary: The Story of Bentley Motors」はYouTubeのベントレー公式チャンネルからご覧いただけます。

<https://www.youtube.com/watch?v=S8WLWNVCUSg>

コラボブランド物語 高級筆記具・ファーマーカステル



ベントレー モーターズはこのほど、ドイツの高級筆記具ブランド「Graf von Faber-Castell (グラフ・フォン・ファーマーカステル)」とパートナーシップを締結しました。時代を超越したデザインや、クラフトマンシップに対する情熱など、両者の物づくりに対する姿勢などに共通点が多かったことから、今回のコラボレーションが実現。2018年中に発売予定の「Graf von Faber-Castell for Bentley」コレクションは、3種類の筆記具と付随するアクセサリで構成されます。すべての製品は、グラフ・フォン・ファーマーカステルとベントレーのクラフトマンシップが共同で設計・開発・製造にあたります。ベントレーのプロダクトデザイン責任者、クリス・クーク氏 (写真左) と、グラフ・フォン・ファーマーカステルのチャールズ・フォン・ファーマーカステル氏 (写真右) は、両ブランドの価値と伝統を反映し、クラシックなテイストを持ちながら、現代的なベンになるようにデザインしました。

「Graf von Faber-Castell for Bentley」は9月1日発売予定。グラフ・フォン・ファーマーカステルの正規販売店やオンラインストア、ベントレーのリテーラーでも取り扱いいただくことを予定しています。

APPEARANCE

セールスパーソンの身だしなみ ＜紳士靴編＞

男性のビジネスシーンで欠かせないアイテムが紳士靴です。英国ブランドのベントレーを扱うセールスパーソンであれば、伝統を重んじてきた英国スタイルの紳士靴を選びたいところ。そのなかでも特に定番とされているのであれば、まず間違いはありません。

日本ではイタリアやフランス、アメリカなどの紳士靴ブランドも多く、近年では英国の紳士靴ブランドもこれらの国の影響を受けており、それぞれの垣根は低くなりつつあります。とはいえ、極度に靴の先端が細いイタリアンブランドの紳士靴などは、できるだけ避けるのが無難でしょう。

高価な靴を購入する必要はありませんが、複数の靴をローテーションで履くことをお勧めします。1日履いたら数日休ませるのが理想で、最低でも3足は持っておきたいところ。これが靴を長持ちさせる秘訣でもあります。

人によっては、ビジネスの相手の靴の状態を見ただけで、相手の能力や地位を推し量る人もいます。たとえ年数が経っている靴でも、ピカピカに手入れされた状態ならば、それだけで信頼されることもあるのです。

英国式の紳士靴でもつま先のデザインはさまざま。ここでは定番とされる4種類の形状をご紹介します。



Straight
Tip

ストレートチップ

つま先の切り替えの革が真っすぐになった伝統的なデザイン。革靴においては定番中の定番で、「メダリオン」と呼ばれる穴飾りがない内羽式の靴は、貴族も式典で履くような最もフォーマルなスタイルです。



Plain Toe

プレーントウ

つま先に一切の装飾を施さないシンプルさが大きな特徴。装飾がないので、スーツの個性を引き立てたい人にお勧め。活用シーンは幅広く、内羽根式ならフォーマルなシーンにもマッチします。



Wing Tip

ウィングチップ

つま先部分に翼のようなW型の切り替え革を用いた革靴の総称。英国では「フルブローグ」と呼ばれることも。クラシックな雰囲気演出するのに適していますが、お堅い業種では敬遠されることもあります。



U Tip
V Tip

Uチップ/Vチップ

U字型やV字型の切り替え革をつま先に用いたデザイン。英国ではカントリーシューズとして発展しましたが、カジュアルにもスーツスタイルにもマッチすることから、非常に人気のあるデザインです。

オートマチックトランスミッションの今

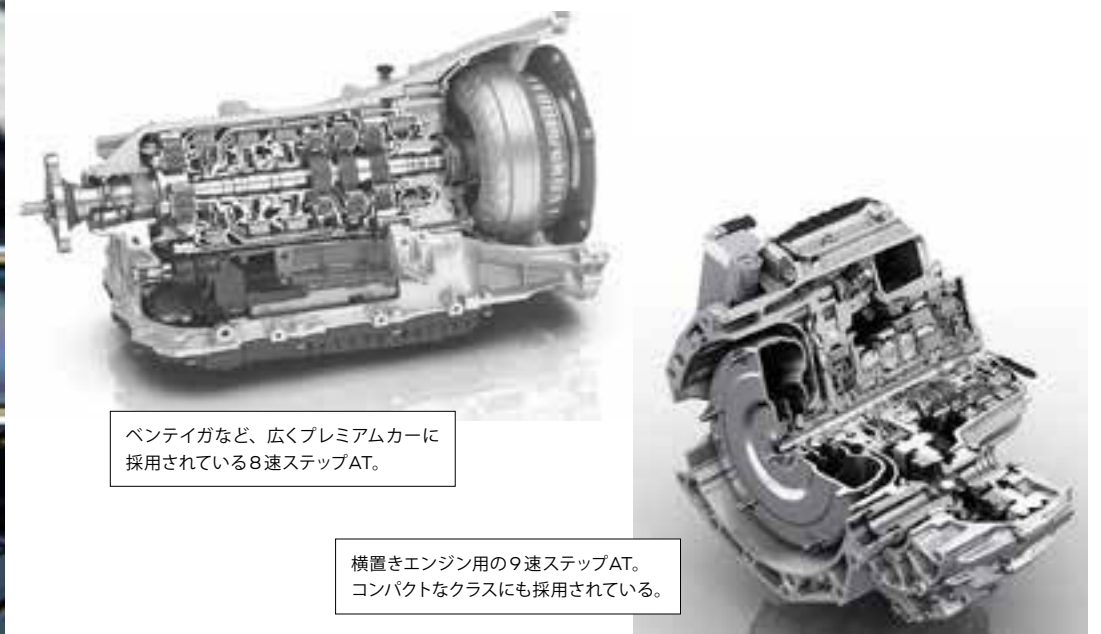
強まる環境性能向上の要求やハイブリッドなどの電動化への対応のためにオートマチックトランスミッションは日々進化を続けています。

今回は、ステップATやDCT（デュアル・クラッチ・トランスミッション）の現状と未来をレポートします。



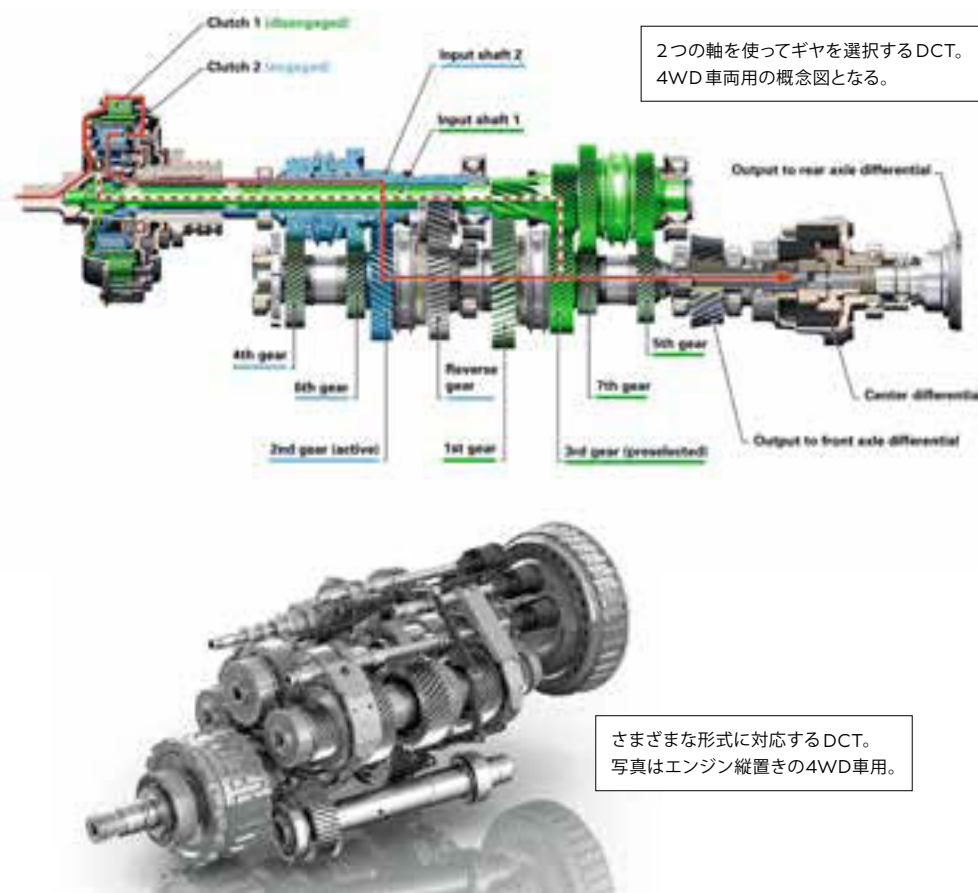
多段化するステップAT

トルクコンバーターを備えたステップATは、オートマチックトランスミッションの代表的な存在です。内部のプラネタリーギヤ（遊星ギヤ）の変速比が決まっているため、連続可変するCVTに対して、有段のステップATと呼ばれることになりました。トルクコンバーターを使って力を伝達するため、滑らかな変速や加速が特徴です。昨今の高まる燃費性能向上の要求に応えるために、多段化が進んでおり、現在では8速ATでも、ごく普通の存在に。すでに横置き用9速は量産車に広く採用されるようになり、10速ATも量産車への採用が始まりました。一方で、トランスミッションの有力サプライヤーからは「8速ATより上の多段化は開発しない。それ以上は重いだけで無駄だ」という声も上がっています。



DCTのメリットとデメリット

マニュアルトランスミッションの進化版とでも言えるのがDCT（デュアル・クラッチ・トランスミッション）です。メーカーによってDCTではなく、「DSG」「PDK」「Sトロニック」などという名称を付けられていることもあります。名称に「デュアル」とあるように、2軸でギヤを使い、2つのクラッチを使って変速を行います。そのため変速が瞬時にでき、変速時に力がほとんど抜けないというメリットを備えます。ギヤがつながっているときの強いダイレクト感や、全体に軽量にできることも美点です。そのためスポーツカーに搭載されることが多いのも特徴です。デメリットはトルクコンバーターを用いないため、特に低速時にギクシャクしがちなこと。ただし、すでに普及から15年以上が過ぎて熟成が進み、プレミアムカーに相応しい洗練された滑らかな変速を実現しています。



電動化するATの未来

近い将来、クルマの多くはハイブリッド化されてゆきます。そうしたときに、日本のプリウスのようにハイブリッド専用のトランスミッションを利用する方法だけでなく、従来あるトランスミッションを活用するという手段もあります。日本の自動車メーカーは自社製のハイブリッド専用トランスミッションを利用することがほとんどですが、欧州ブランドの多くは従来あるトランスミッションの活用を選択することが予想されます。その場合、トランスミッション内部にモーターが組み込まれます。ステップATであればトルクコンバーター部、DCTであればクラッチ部にモーターが置かれるのです。そうすると、これまでステップATやDCTの苦手なところをモーターでカバーできます。発進加速をモーターが担えば、ステップATは、よりハイギヤード化できるため燃費性能が高まります。DCTのギクシャク感もモーターがあれば簡単に解消できるのです。モーターを備えた新世代のトランスミッションは燃費性能だけでなく、快適性も高めることが可能となるのです。

